様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５７７０２９８

研究課題名（和文）造船・港湾運送業のグローバルな空間編成とローカルな場所の動態に関する地理学的研究

研究課題名（英文）Geographical Study of Global Spatial Restructuring and Local dynamics of place: The case of shipbuilding industry and port industry in Osaka.

研究代表者
原口　剛（Haraguchi, Takeshi）

神戸大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：４０４６４５９９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は、以下のとおりである。第一に、本研究はグローバルな比較研究の視座にたちつつ、研究対象地域の固有性や、日本の都市下層労働市場が有する特異性を明らかにした。第二に、寄せ場の労働市場にいてこれまで見落とされてきた造船業および港湾運送業に焦点をあてることにより、釜ヶ崎が歴史的に有する「木津川造船」や大阪港と関係性を明らかにした。第三に、これらの研究成果により、グローバルな空間編成過程とローカルな場所の社会文化の変容との相互関係を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study achieved the following findings. Firstly, this study revealed the uniqueness of the study area and the specific nature of Japanese society's urban lower labor market from global perspective. Secondly, this study revealed the relationship between Kamagasaki and “Kidugawa shipbuilding” or Osaka port, which was overlooked in existing research. Thirdly, basing on such findings, this study revealed interaction between the global spatial restructuring and the change of local culture.

研究分野：人文地理学

キーワード：造船業　港湾運送業　空間　場所　グローバル　ローカル　労働の地理学

１．研究開始当初の背景

（１）現代の地理学の世界的潮流においては、資本のグローバルな空間編成のなかにローカルな場所がどのように組み込まれるのかという問いのもと、グローバル／ローカルの二項対立を超えた視点が必要不可欠とされている。しかしながら、地理学においてもっとも重視される事例研究の局面では、このような視点にたつ研究は多いとはいえない。造船業・港湾運送業を対象とした調査研究は、それらの産業が国際交易というグローバル規模の資本の循環にとって不可欠の部面であることから、この課題に取り組むうえで大きな可能性を有するものと考えられる。

（２）本研究には、これまで積み重ねてきた大阪・釜ヶ崎を主たるフィールドとする研究活動を発展させるという意味もある。造船業・港湾運送業は 1970 年代まで寄せ場・釜ヶ崎における主要な就労先であったが、既存の研究においてそれらの産業は注目されてこなかった。造船業・港湾運送業に着目することで、木津川造船や大阪港といった場所と釜ヶ崎が有する関係性を明らかにすることができるものと考えられる。また、これらの産業に着目することで、これまで積み重ねてきた釜ヶ崎を中心としたローカルな研究活動を、グローバルな視野への分析へと架橋することができるものと考えられる。

２．研究の目的

（１）戦後の大阪の造船業・港湾運送業を対象として、その隆盛や縮小・撤退の過程を検証する。造船業に関しては、かつて名村造船所・日立造船所・佐野安造船所・大阪造船所等の大小の造船所が立地した木津川流域を調査研究対象とする。港湾運送業については、築港や南港などの大阪港湾一帯を対象とする。

（２）上記の２地域を対象として、造船業・港湾運送業の盛衰は当該地域の社会文化に及ぼした影響を明らかにするとともに、都市下層労働市場に焦点をあて、寄せ場・釜ヶ崎との関係性を明らかにする。

３．研究の方法

（１）本研究は国際社会史研究所（iish）が主催するプロジェクト「グローバル・レイバー・ヒストリー」の一環として進める。このような国際的な共同研究体制のもと、国内外の研究成果との比較の視座を踏まえつつ進める。このような方法を採ることにより、ローカルでありながらグローバルな視座を有する研究となる。

（２）本研究では経済地理学的な視点、社会・文化地理学的な視点など、領域横断的な視点のもとで研究を進める。そのことにより、経済・政治・社会・文化といった下位領域の境界を超えた研究を展開することが可能となる。

４．研究成果

（１）本研究では、「グローバル・レイバー・ヒストリー」のワークショップにおいて研究成果を逐次報告し、各国の研究者による研究成果と本研究の知見とを比較検証した。その結果、以下の知見を得た。第一に、不安定就労を基盤とする造船業の労働市場の構造は歴史的・世界的に共通の性格である。しかしながら、第二に、それがいかなる様態として実現されるかという点には、場所によって相当の差異がみられる。なかでも重層的下請けや「社外工」、都市日雇労働市場から成るシステムは、日本の労働市場特有の様態であることが明らかとなった。

以下、上記の知見に関連する図を提示し、本研究の成果を具体的に示す。まず、現在の造船所の立地の概要を示したものが、図１である。

図１　造船所の立地の概要（2010 年）
資料：『海運造船会社要覧』2010 年度版をもとに筆者作成.

日本の造船業は、第二次世界大戦後に急速に成長し、造船業の世界市場を席巻するに至った。そのような当産業の急激な成長は、技術革新等の要因に加え、日本の造船業が「社外工」等の労働力を活用し、労働力費用を低廉化させたことにより実現されたものであった。下記の図２は、戦後日本における「輸出船（Export Ships）「国内船（Domestic ships)」・国外船・「ナショナル・バルクキャリアーズ（N.B.C）社」別の新建造許可実績の推移を示している。

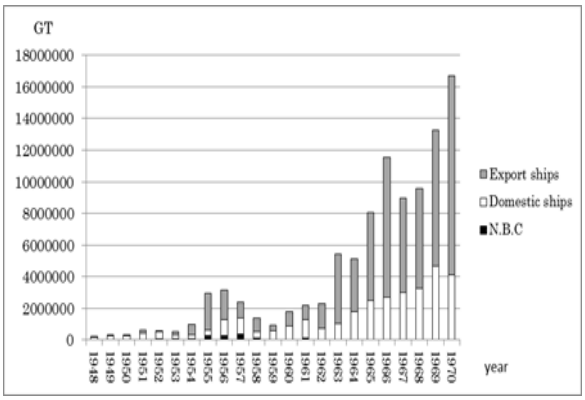

図２　新建造許可実績の推移
資料：日本造船工業会『日本造船工業会 30 年史』（1980 年）より筆者作成.

また、下記の図３は「直接雇用（Direct hiring)」「間接雇用（Indirect hiring)」、「本工（Full-time laborers）」「臨時工（Temporary laborers）」「請負工（Contract laborers)」「常雇（Regular laborers)」「日雇（Day laborers)」からなる、労働市場の概要を示した概念図である。

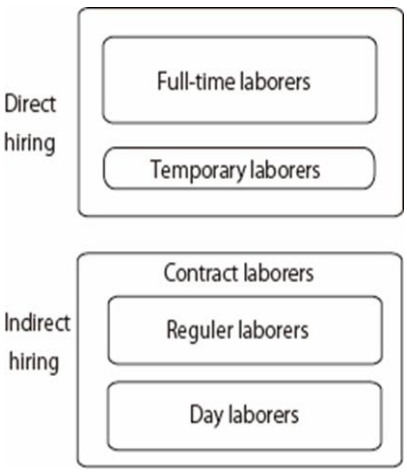

図３　造船業における労働力構成の概念図

しかしながら、1970 年代半ばにおとずれた世界的な造船不況のなかで、日本の造船業は設備や労働力の過剰を抱える状態に陥った。なかでも労働力削減の標的とされたのが、不安定雇用のもとにある労働者であった。次の図４は、「本工（Full-time laborers)」「社外工（Subcontract laborers)」別の労働力構成の推移である。

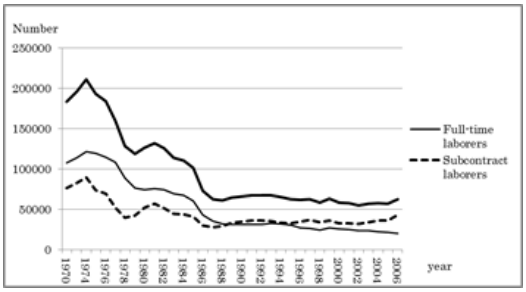

図４　1970 年以降の労働力構成の変化
資料：運輸省海上技術安全局『造船統計要覧』各年度版より筆者作成

以上のようなグローバルかつ全国的な動向が、本研究の対象地である大阪においても顕著にみられた。すなわち、1970 年代以降の造船不況期において、日雇労働者を含む多数の請負工が、労働力削減のもと失業状態に陥ったのである。本研究では、これらの資料分析によって造船業の盛衰と労働市場の動態を具体的に示すとともに、グローバルな視座からその特異性を位置づけた。

（２）本研究では、造船業・港湾運送業といった産業に着目することで、都市下層労働市場である寄せ場・釜ヶ崎の実態を新たな視点から明らかにすることができた。第一に、図５にみられるように、1970 年代までの釜ヶ崎の労働市場においては、「製造業」「港湾運送業」が大きな比重を占めていた。このうち「製造業」の大部分を造船業が占め、また「港湾運送業」は大阪港における労働が占めているということが明らかになった。

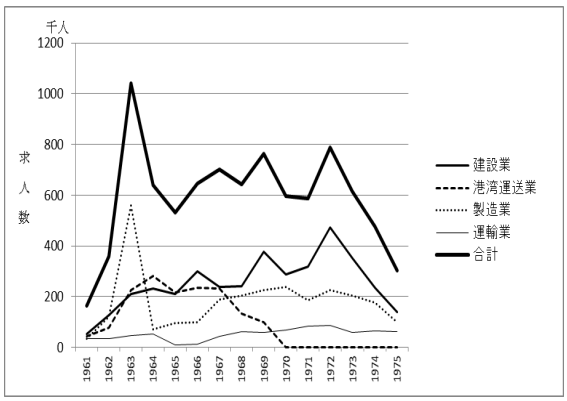

図５　釜ヶ崎における求人数の推移
資料：西成労働福祉センター『西成地域日雇労働者の就労と福祉のために』各年度版より筆者作成

また、港湾運送業・造船業における日雇労働力の供給に際しては、飯場や手配師が労働力

仲介業者として介在していた。そのような労働力仲介業者に着目することにより、本研究は釜ヶ崎から大阪港一帯にかけて拡がる労働の地理を明らかにした。1960 年代初頭の飯場の立地を表わしたのが、下記の図２である。

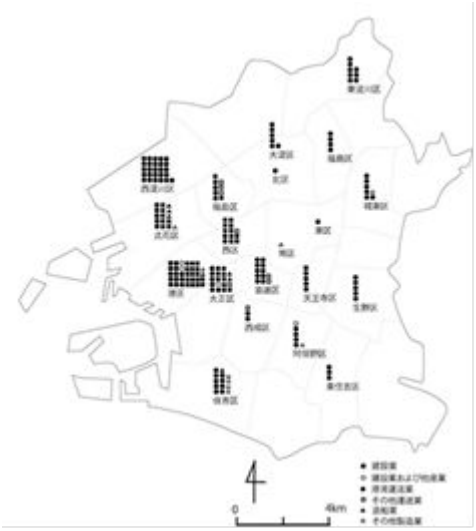

図２　1960 年代初頭の飯場の立地
資料：「求人連絡員届」より筆者作成

（３）上記の研究知見により、以下のことが明らかになった。木津川地域一帯においては、1970 年代半ば以降に各造船所が撤退することによって失業状態が生み出され、地域経済は衰退させられた。また、大阪港一帯の地域においては、同じく 1970 年代半ば以降のコンテナ化を軸とした労働の機械化によって「労働の景観」は失われ、その後ウォーターフロント開発によって「消費の景観」へと塗り替えられていった。これらの社会文化の変容は、グローバルな資本の編成過程のなかで生じたものであった。この知見は、資本のグローバルな空間編成のなかにローカルな場所がどのように組み込まれるのかという現代地理学の課題を、事例研究の立場から明らかにするという点において、斯学の発展に大きく寄与するものであるといえよう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３　件）
①原口剛、都市の植民地主義と「棄民」：寄せ場・釜ヶ崎の思想と実践からの問い、立命館言語文化研究、査読無し、7 巻、2015、pp.181-191.

② Takeshi Haraguchi, Kazuya Sakurada, Deconstructing the Myth of Japanese Society: to reclaim the concept of ‘precarity’, *Dialogue in Human Geography*, 査読無し、5 巻 1 号、2015、pp.118-120.
DOI:10.1177/2043820614563440.

③原口剛、「大阪的なもの」の所在：巷からの都市論に向けて、市政研究、査読無し、160 巻、2013、pp.28-36.

〔学会発表〕（計　２　件）
①Takeshi Haraguchi, Workforce Reduction in the Japanese shipbuilding Industry, Workshop “Workers Reductions in Shipbuilding Industries: Approaches from a Global Perspective, 2014 年 7 月 7 日, ベルリン（ドイツ）

②Takeshi Haraguchi, Kazuya SAKURADA, The Development and Re-organization of Industrial Structure of the Shipbuilding in Postwar Japan: A General Outline, Workshop “In the Same Boat?: Shipbuilding and Ship Repair Worker: a Global Labor History(1950-2010)”, 2013年5月22日, アムステルダム（オランダ）.

〔図書〕（計　１　件）
① Benjamin Fraser, Andy Merrifield, Manuel Yang, Takeshi Haraguchi, Kazuya Sakurada 他 9 名, Marxism and Urban Culture, Lexington Books, 2014, 265(213-238).

６．研究組織
(1)研究代表者
原口　剛（HARAGUCHI, Takeshi）
神戸大学・人文学研究科・准教授
研究者番号：40464599